

# 生活・福祉（ウェルビーイング）大国 デンマークの形成要因に関する研究

～N・F・S・グルントヴィの教育理念と実践を中心にして～

賀 戸 一 郎

A Study on One of the Factors which formed the great Country of  
Denmark based on Life and Well-Being :

Focussing on N. F. S. Grundtvig' s Ideas and Practice concerning  
Education

Ichiro Kado

## はじめに

デンマークという国は、どのような建国の歴史と軌跡をもっている国であろうか？現在はどんな国であろうか？デンマークの国民はどんな考え方を、どんな生活や教育を受けて、どんな働き方をしているのであろうか？なぜ福祉国家をつくり、維持し続けているのだろうか？今日世界的な福祉制度・政策・実践の共通の基本理念として定着して来ている「ノーマライゼーション（英語ではノーマライゼーションと標記している）」の発祥の国（N・E・バンク・ミッケルセン氏によって提唱された）であるのだろうか？デンマークの人びとはどうして人間と同じように人間以外のすべての動植物や環境に優しくすることができているのであろうか？

デンマークは、現在人口は約550万人弱の小国であるが、その国の内実は経

済成長と環境のバランスをとり、環境（人間以外のすべての生きものを含めて）に優しい街づくりを持続している環境大国であり、武装も最小限しか持たない平和大国であり、世界で最も住みやすい国（生活大国）と言われたり、“幸福度” 世界一の国と言われたり、“高税大国”（わが国では“高福祉高負担”の国）とも言われているなど、国民一人ひとりの成熟した民主主義（主権在民）により共同、連帯、共生の真の豊かさを感じ取ることのできる“理想郷”に近い生涯生活に到達した国であると言えるであろう。

デンマークで長年（30余年）暮らしているある日本人（家族）が、日本からの社会福祉、教育、環境等の視察・研修者たちが共通して抱えている課題について比喩を交えて次のように述べている。

「日本とデンマークの世界には、今もなお変わらずに残っている大きな違いがある。その一つが、日本は100ボルト、ヨーロッパ（デンマークを含めた）は220ボルトという電圧の違いです。なぜこんな面倒な違いを作ってしまったのでしょうか。そのいきさつはどうもよくわかりませんが、とにかくこの大きな電圧は、歴然の事実で、どうもこれからも縮まることはなさそうです。ですから日本の電化製品をヨーロッパで使おうとすれば、どうしても変圧器が必要になります。ただ便利なもので、これさえ持って行けば、日本の電気釜でも、ドライヤーでも、ワープロでもショートせずにくらくつかえます。

もう一つの違い、これはなかなか見えにくくて厄介なのですが、それは人びとの考え方、物の見方です。実はこの違い、100ボルトと220ボルト電圧の差と同じくらい大きいもののように思えます。少なくとも二つの世界にまたがって生きている私達は、それを毎日の仕事や生活を通じて強く感じているのです。……省略……。……考え方や物の見方のほうの変圧器を忘れずに持参される方は、どうも少ないようです。つまり大半の方が、220ボルトのヨーロッパを、100ボルトの目で見て帰られるのです。これでは、ショートしないまでも、なかなか“220ボルトの世界の本質”までは見えてこないのではないのでしょうか。

（超）高齢社会を迎えた日本では、今高齢者福祉問題・課題が大きな社会問題・課題として取り上げられ、国を挙げての福祉制度作りが進んでいます。そのために、福祉先進国デンマークへの関心も高まり、この分野での視察は、近

年急上昇で増えています。ただ、『素晴らしい施設を見て話も聞いてきたのだが、どうもよく理解できない』という声もよく聞かれます。やはりここでも100 ボルトと 220 ボルトの違いが障害になっているのではないのでしょうか。」（小島ブランド孝子／澤渡夏代ブランド 1998:iv - v）

上述のような指摘を真摯に受け止めてものごとの本質を見極めていかないと、デンマークの本当の素晴らしさやそれを実現するための実行力の源を探し出すこと（小国を知り、その価値を知り、哲学に学ぶことなくして）は、いつまでたってもできないであろう。本論文においては、デンマークの社会福祉を世界的な高水準に到達させ、今もなお高水準を継続させている大きな要素のひとつとしてデンマークならではの教育の思想と実践について焦点を当てて考察することによって、100 ボルト文化の国の生活者が 220 ボルト文化の国の生活者に関して学ぶべき諸点の本質を探求することを目的としている。

具体的には、まず第1章において、デンマーク最大の教育思想家であり実践家である N・F・S・グルントヴィの教育思想と実践の概要について述べ、それが生活・福祉大国を育む原点であったこと（＝“教育の福祉化”＜筆者の造語＞）についても述べることにする。

そして第2章においては、N・F・S・グルントヴィの教育理念と教育実践とを架橋したことの最大の意義として、デンマークの市民社会の発展の原動力となったこと、具体的には民主主義の形成と成熟をもたらす教育であったことについて述べる。

更に第3章においては、C・M・コルの教育思想と教育実践について述べた後、彼と N・F・S・グルントヴィとの密接な関係性についても簡潔に触れることにする。

第4章においては、第3章と第4章のデンマークを代表する教育思想家と実践家（者）とを源流とした今日のデンマーク教育の礎としての国民学校の教育の基本的目的と教育実践の内容について概説することにする。

おわりにおいては、デンマークが二十一世紀においても社会福祉国家を継続し続けるための不安な様相とそれらを克服していくために、デンマーク国民が再評価し始めているキリスト教実存主義哲学者、S・A・キルケゴールの思想

と社会福祉国家形成との関連性についても少し触れて、本稿を綴じることにする。

## 第 I 章：N・F・S・グルントヴィと C・M・コルの教育思想と 実践の偉大な影響 —デンマーク独自の教育（制度）が福祉大 国を育む—

デンマークといえば、ハンス・クリスチャン・アンデルセン〈Hans Christian Andersen: 1805–1875〉と彼の童話だけではない。また、世界的な哲学者セーレン・オービエ・キルケゴール (Søren Aage Kierkegaard: 1813–1855) と彼のキリスト教実存主義哲学（“実存哲学の祖”と言われている）だけでもない。デンマークは、ニコライ・フレデリック・セヴァリン・グルントヴィ (Grundtvig, Nikolaj F.S.: 1783–1872) とクリステン・ミッケルセン・コル (Christen Mikkelsen Kold: 1816–1870) の教育理念を礎として創られたデンマーク独自の学校教育制度としての国民高等学校（フォルケホイスコーレ〈Folkehøjskole〉）の国でもある。

1999 年は、デンマークが自由主義憲法を制定して近代国家としての第一歩を踏み出してから、150 年目にあたった。近代国家として歩み始めてから 24 年後の 1873 年に日本の特命大使の一行（岩倉使節団）がデンマークを訪問している（詳細については資料 1 を参照）。またわが国の有名な思想家、内村鑑三氏<sup>註1)</sup>によってデンマーク（当時は「デンマルク国」と表現している）と N・F・S・グルントヴィについては、20 世紀初頭以来、日本でも名前程度は知られるようになった（詳細については資料 2 を参照）。後には国民高等学校（フォルケホイスコーレ）についても一部の人には知られるようになった。

今日、生活大国・幸福度世界一と称されている小さな国デンマークが福祉大国に到達した要因は何であったのであろうか、ここに到る基礎固めをおこなったのは、どんな人物であったのであろうか。福祉大国を想像・創造し、持続可能にさせている“個人主義”＝“真の民主主義”を構築した基本的な教育思想とはどんなものであったのであろうか。

本章においては、N・F・S・グルントヴィという人物が国民から慕われ、

彼が今日のデンマーク教育の根幹の形成にもたらした影響ならびに今日のデンマークの社会福祉国家の根幹の形成にも大きな影響を及ぼしていることに限定して述べることにする。

N・F・S・グルントヴィは、S・A・“キルケゴール”<sup>註2)</sup>と同時代に、後世のデンマーク社会に絶大な影響を与えた人物である。彼は、詩人・牧師・教育者・思想家である。彼の名前は、S・A・キルケゴールほど世界に広く知れ渡ることにはなかったが、デンマーク人にとっては、むしろ彼の方が有名であり、“心の父”とか“精神の父”、あるいは“復興の父”と称されて、よりデンマーク国民に大きなインパクトを持っていたとさえ言われている人物である。

その理由としては、まず第一に彼は牧師であり、詩人であったので、実に沢山の賛美歌を作詞しており、彼の作った賛美歌は、教会のミサ、クリスマス、洗礼式、結婚式、お葬式の度に、また学校や集会で皆が合唱する時にもしばしば歌われており、何らかの機会においてすべての国民に親しまれているためである。

第二に、彼は教育者、思想家として、若者、特に若い農民の精神教育の必要性を主張し、この彼の考え方が、デンマーク独特の教育制度である「国民高等学校（Folkehøjskole）」を生み出し、この教育精神が現代のデンマークにも根強く息づいているためである。N・F・S・グルントヴィは、デンマークでは他に類するものがない、世界的なレベルにある教育者である。しかも「フォルケホイスコーレ運動」によって、N・F・S・グルントヴィの名は西側諸国の“成人教育の父”となり、N・F・S・グルントヴィへの関心とフォルケホイスコーレ運動は、今日も発展途上国で依然として広まりつつある。

近代デンマークにおいて、N・F・S・グルントヴィほど重要な意味を持った人は他にいないであろうと、言う人もいる。彼が影響を及ぼした分野は、数知れない。彼が重要な寄与をした領域は、哲学、文献学、神学、歴史、政治理論、そして教育である。N・F・S・グルントヴィの不滅の遺産の明らかな例としては、754のデンマークの賛美歌のうち、271の歌が彼によって書かれたという事実があげられる。

N・F・S・グルントヴィが、デンマーク独自のものを表現する特別な才能

に恵まれていたということは疑いない。しかし、もっと重要なことは、彼がまた普遍的なものを表現する能力を併せ持っていたことである。N・F・S・グルントヴィが、「フォルケリ (Folkelig: ポプラー・ユニヴァーサル、民衆、人民的)」と「ユニヴァーサル」との結合を要求したのである。この「ポプラー・ユニヴァーサル」の概念は、抽象的なインターナショナルリズムとナショナルリズム的な原理主義のいずれとも、対象をなすもののほかならない。

N・F・S・グルントヴィが生きていた 19 世紀半ばのデンマークは政情が非常に不安定で、ナポレオン軍の肩をもったことから、イギリスとの戦争を引き起こし、デンマーク政府は、1813 年に敗戦を待たずして破産し、その後 19 世紀半ばにはドイツと戦って破れ、国内で最だったのである。この一環として、コンリコ・ダルガスという工兵士官がユトランドも肥沃な地域であったユトランド半島の南部を失い、最悪の状態に陥った。戦いに破れ、土地を失い、天然資源も乏しい小国デンマーク (資料 3 参照) に残ったものは“人間”しかなかった。国を復興させるためには、この“人間”資源の高揚をはかり、力を結集する以外に道は考えられなかった。“外で失ったものを、内に取り戻す”、これが 19 世紀のデンマークの一大事業として半島の干拓事業を行った。<sup>註3)</sup>

このような中で、N・F・S・グルントヴィは、当時デンマークに、農業技術だけでなく、デンマーク人としての自覚を高める教育、具体的には、歴史・言語・文学などや、神と人間の関係を説くことを唱えた。このような彼の考え方が、打ちのめされたデンマークの国民の共感を得たことは、想像に難しくはないと思われる。自分の国に対する認識を高め、過去の歴史からアイデンティティを見出し、それにより個人が自立する。そして自立した個人が、共同社会の中で、個人の責任を果たす。これが彼の基本的な考え方である。<sup>註4)</sup>

いずれにせよ、今日のデンマーク人に根付いている“個人主義”は、十九世紀にデンマークが排出した S・A・キルケゴールや N・F・S・グルントヴィならびに C・M・コルのような偉大な数名の人びとにより、基礎が固められたと言ってよいと考える。

## 第Ⅱ章 N・F・S・グルントヴィが基本的な教育理念と教育実践とを架橋したことの意義 ～デンマークの市民社会の発展の原動力（民主主義の形成・成熟をもたらした国民教育）～

本章では現在のデンマークの教育の基礎を築いた代表的なひとりとして取り上げるべき人物、N・F・S・グルントヴィの存在と彼の教育理念、そしてその教育実践（方法）について述べたうえで、さらに今日的意義について述べることにする。

### 1. N・F・S・グルントヴィの教育思想の基盤

世界に例のないデンマークの独自の教育制度である「国民高等学校（フォルケケホイスコーレ：Folkehøjskole）」の創始者N・F・S・グルントヴィについては、日本ではほとんど知られていない。<sup>註5)</sup>

N・F・S・グルントヴィは1783年9月8日にデンマークのシェラン島南東部にあるウドビイーの村で牧師の家庭に生まれた。彼は教育者としてのみならず、牧師、哲学者、詩人、政治家といった多様な顔をもつ人物であるが、なによりも彼は「近代デンマーク精神の父」と称されるほど今日のデンマーク社会の形成に大きな影響を及ぼした人物である。

彼は、1798年にユトランド半島のデュレゴードの牧師館にラテン語の受験勉強のため預けられ、その後大学入学資格を得るためオーフスのグラマースクールに入学、1800年にはコペンハーゲン大学で神学を修める。神学部では特にゲーテ、シェイクスピア、ドイツ啓蒙思想家ヘルダーの歴史哲学などを学んだが、これによって彼の思想の中心となるロマン主義の基盤を身につけたといわれている。1803年神学の学位を取得した後、牧師として活動を開始するが、詩人として古代スカンディナヴィアの言語や文学を紹介するなど文筆活動もてがける。

1808年には教師生活を続けるかわら『北歐神話』を出版するが、その過程で北歐神話やデンマークの風土、自然、農民の生活などを題材にした多くの詩をつくり、それが賛美歌としてデンマーク国民に愛唱されるようになった。

彼は、1818-21年にかけて『デンマークのサクソン年代記 (Saxos D) anmarks Kromik』と『ノルウェー王スノリ年代記 (Snorres Norges Konge-Kranike)』の2つの年代記の翻訳を完成し、プレストの教会牧師に任命される。しかし、コペンハーゲンの救世主教会 (フオア・フルサー教会) の牧師になったとき、体制化して墮落した既成のキリスト教を批判したため牧師職を剥奪される。それは教会側と真理の存在に関して対立したことが原因であったが、N・F・S・グルントヴィは「真理は聖書の中にあるのではなくて、教会に集う信者の中にある」と主張し、これが既成の伝統的なキリスト教会や聖書解釈学者の反感をかっただためである。

しかし、彼の主張や行動は農民たちや改革派の牧師たちに受け入れられ、その後の教会改革運動に影響を与え、さらには農民の意識を目覚めさせ、それが1930年代にグルントヴィ派は社会改革運動によるデンマーク民主化の担い手となり、度重なる戦争によって疲弊したデンマークの復興に大きな役割を果たした。

## 2. N・F・S・グルントヴィの教育思想

彼のめざした教育思想の特徴を、筆者は関係した幾つかの文献や資料を総合的に検討し、次の4つにまとめてみた。

### (1) 生きる教育

そのめざすところのものは、自発的に自分自身に光を当て、自分の才能、能力に目覚め、社会に貢献する自分を育てあげることが、「生きた教育」であるという。別の言い方をすれば、自発的に自分自身に光を当て、共同体 (=社会) のなかでの自分の役割を自覚 (社会的自覚) することに目覚めるというのである (岩原: 1994a 参照)。これはN・F・S・グルントヴィが「オップリュースニング (oplysning)」と呼ぶもので、日本語では「啓発」と訳される言葉である。従って彼に言わせれば、教育とは個人をして啓発することである、ということであろう。「啓発」とは要するに、自己の社会的使命がなんであるかを主体的に認識することだと理解してよいであろう。

彼は「生の啓発」という言葉を用いたが、これは「人間の生に光を当てる」



ということである。これは人間が生きていくうえで、光を当てられることにより、自分自身の内部から光を当てられることにより、自分自身の内部から光り輝き、その照らされた光によって前進することが成長につながるという理解である。換言するならば、教育はあらかじめ決めた方向に引っ張っていくものではなく、それぞれの人間が持っている能力に光を当て、それを開花させその人自身が成長させることによって、新しい未知の社会をつくり上げるためのものである（岩原：1994b 参照）。

啓発は、個人は一人ひとり異なっているので同じような形ではあらわれることはない。人間はそれぞれ違うように、個人が自発的に「啓発」すれば、それは決して同じようなものにはならず、その結果として、人びとが社会を構成するうえで、それぞれに応じた役割りの分担がなされるという（岩原：1994a 参照）。

## （2）自由な存在として受容された関係の中での教育

“生きた教育”は人間尊重を基礎とし、自由な存在として受容される関係のなかで教育がなされるものである。

教育の実際の場面では生活に根ざした“生きた言葉”（＝生活実践から生まれた言葉）が交わされるなかで、対話（コミュニケーション）が成立し、対話による相互作用とそれによってもたらされる相互理解と全人的な人間形成がなされる。そこから共同社会の基となる相互理解も育まれるのである。このことは、いつの時代、どこにおいても必要とされる大切なことである。

## （3）“生きた言葉”によるによって人間形成・人格形成の深まり（深化）の実現

このような対話（コミュニケーション）が教師と生徒、生徒同士の間に相互作用をうながし、対等の立場での「生きた言葉」による対話（コミュニケーション）によって人間形成、人格形成の深まりが実現されるのである。

このような対話をとおして他者の新たな部分を発見し、自己の再発見を体験（体得）する。それが相互理解と豊かな人間関係の形成をもたらすのである。自由で対等な立場での対話による相互作用、「生きた言葉」によるコミュニケーションと相互理解が N・F・S・グルントヴィのめざした教育であった。

これが国民高等学校の精神的基盤、教育理念、人間形成をめざしたものである。

#### (4) N・F・S・グルントヴィのめざす教育理念に必要な不可欠な要素

自由なる存在としての人間観（＝人間哲学）と、自由な教育の実践が不可欠な要素となっている。この自由こそが人間のもつ能力を遺憾なく発揮させるのであり、教育とはその能力を十分に開花、発揮させ、その人自身の望ましい成長を助けることなのである。画一的な教育、管理された教育からは自由な教育はありえないし、そのような教育からはもてる能力を十分に伸ばしうることは期待できない。主体的で自由な対話から新しい価値が創造され、本当の意味で“生きた社会”をつくることができるというのがN・F・S・グルントヴィの教育思想（“生の啓蒙”という表現が用いられている）の基本であった（岩原：1994b 参照）。

### 3. N・F・S・グルントヴィとC・M・コルの教育思想と実践との密接な関係性

C・M・コルは、デンマークの最高の教育者であると言われる。彼は、デンマーク独自の民衆のオルタナティヴ教育・対抗教育の創始者のひとりであり、現代でも多大なる社会的な影響力を持っている。彼が実践した教育は、今日では公教育のなかに取り入れられ、デンマークの公教育における中心思想となり、近代デンマークの教育のあり方を決定した。

彼の教育思想と実践は、スイスの教育者ヨハン・ハインリヒ・ペスタロッチ（Johan Heinrich Pestalozzi：1746－1827）に匹敵するような重要性を近代教育学史において持っていると評価する者も少なからずいる。しかし、不幸にして公教育に対抗する民衆教育という性格、すなわち反権威主義という性格のゆえに対外的な宣伝や国際的な評価の獲得などにあまり関心を持たず、他国に広く知られることはなかった。また、小国デンマークでの実践とデンマーク語という制約も大きかったために、北欧諸国を除けば隣国ドイツに幾つかの研究論文や著書、彼の童話の翻訳があるにとどまっている。しかし、現代においてはバルト三国や東欧諸国などを中心に、民主化の過程における教育の一つの指

針としてC・M・コルの実践と教育思想が注目されるなど、国際的な評価も高まってきているようである。

C・M・コルの活動した時代には、グローバリゼーションの概念は存在しなかったが、当時の時代精神は合理的で道具的な思考によって刻印されており、最も重要な道具が国家の管理でした。C・M・コルは理論家、著述家ではなく教育の実践者であったので、生涯で一つの著作（論文）しか残っていない。懸賞への応募作、「子どもの学校論」（1850年）では、当時の教育思想の基盤は合理的思考にあると述べている。彼は、子どもの人間形成と教育は、教師、児童、そして親たちの関係であるという理解を持っていた。「コル式学校として認められる学校があって、そこに適用される一定の教育理論を築き上げる」などというようなことは、C・M・コルの眼中にはなかったはずである。彼にとっては、教えることは教育的なシステム以上のものだったからである。

彼にとって、教育は人間理解の上に築かれるものであったからである。その人間理解とは、自信、生の喜び、好奇心、隣人愛、責任感、自覚、共感といったものが重要な性質となるものである。親、教師、そして児童が、学校で完全に自由に得られることができるものはこれだけだということを彼は確信していたのである。

彼は、教師の役割りを中心的なものとして叙述している。教師が子どもたちに積極的にかかわり、そのなかに入り込んで子どもたちを理解すべきである。そして子どもを教えることに情熱をもて、と彼は教師たちに要求している。教師と子どもたちの対話を通して、知らず知らずのうちに自分の視野を得ることができるように、可能な限り教師は子どもをその渦中に引き込まなければならないということである。

また、親たちも彼にとっては教育の協同のメンバーとして重要である。学校は家庭の延長にほかならないのであるから。親たちは、教育というものが、家庭と学校との共同作業において進められるということ意識して、子どもたちを安心して学校に送ることができなければならないのである。

たとえC・M・コルは彼独自の「教育理論」を書き上げる意図を全然持っていなかったにせよ、彼は教育学の概念を十分に理解していたのである。彼は、

いわゆる「オウム返し」のやり方に反対していたからである。これは、テストに合格できることを中心的なものに見なし、それを子どもたちの第一の課題とするようなやり方である。彼は、この学習観を間違っただけと見なし、それがそう思ったのも、暗記勉強は人間の生のための教育に対して最低のことさえしないと判断したからである。

彼は、おとぎ話、神話、伝説、歴史や宗教のお話しを語ることを身をもってやってきたのである。つまり、子どもたちは熱心な教師によって、そのような物語という方法で心を動かされ、その物語のなかで自分自身の生を反省することができる。物語は、生に対して働きかけるアイデンティティ形成の要素として作用するのであるから。

また C・M・コルは、彼の経験的な教育法を何よりも「実践」のなかで行ったのである。もちろん、彼は自己の教育観、人間観の背景として理論的な理解を持ってはいたが、後世の人びとは C・M・コルを実践者と見なし、哲学者、詩人そして牧師であった N・F・S・グルントヴィイ イクオール C・M・コルの教育思想の理論的な基礎と見なした。C・M・コルと N・F・S・グルントヴィイは、フリースクールとホイスコーレ双方において、デンマークの教育制度上限りなく大きな意義を持っている。二人の教育思想を背景にして、デンマークにおいて政府のすべき第一のことは、教育制度の「多様性」に最善の条件を与えることとされた。多様性とは、教師と親たち、そして子どもたちが、子どもの教育に何が最も良く機能するかについて広く十分な見識を持った重要な当事者と見なされるということの意味している。

C・M・コルの人間観と教育思想は 150 年以上も前のものであるが、彼の最も重要なメッセージは、常にアクチュアルなのである。歴史家が私たちに明瞭に示しているのは、合理的で功利的な考えの基につくられた教育哲学は維持されないということです。なぜなら、それは各人のアイデンティティ、実存、そして信仰の基礎となる普遍的な人間の価値を無視しているからである。

こうした教育の考え方に対して現代では暴力的なまでの圧力がある。ほんの数年前までは、政府の役割は個々の教科の内容についてのガイダンスを示すことだけであって、C・M・コルが基礎づけた理念に大きな敬意を払ったのも

のであった。しかし、今日では、教えられる教科の分野でどれを重視するかについて教師が関与でき、自分の関心に基づいて決定できるという。また、人間の可能性を伸ばすことと専門的な競争は対立するものではなく、同じ価値を持つものと見られてきている。

### 第三章 デンマークの国民学校での教育の目的：民主主義を育むこと＝国民生活の実質的發展の原動力を育むこと

本章においては、デンマークの国民学校（“生のための学校”とも言われている）の教育の具体的な目的について述べることにする。

#### 1. 学校において民主主義を体得する

##### (1) 「国民学校法」における教育の本質的な使命

デンマークの民主主義は、デンマーク国民が長い歴史を経て勝ち得た貴重な財産であるが、その民主主義を市民社会の規範としてだけでなく、デンマークの国民生活の実質的發展の原動力として育んだのがデンマークの教育である。しかもデンマークは1814年に世界で最初に7歳から14歳児に対し、一般教育の義務制<sup>註6)</sup>を手がけた国である。

##### (2) 民主主義の生きた教育

“民主主義”は、デンマークにおいては学校教育の根幹をなすものである。日本の小・中学校に当たる「国民学校（Folkehøjskole）」について定めた「国民学校法」では、学校教育は人間の自由と平等の価値感、そして民主主義を基礎とすべきであると明言している。「国民学校法」はわが国の「教育基本法」に相当するが、その第1条第1項では、国民学校の教育目標として、「国民学校は保護者と協力して生徒個々の全人的な発達を促すため、生徒の知識、技能、学習方法、表現力を高めることを課題とする」と定めている。そして第1条の第5項で「ゆえに、学校での教育と日常生活に対する教育の基本姿勢はすべて精神的に自由で人間として同等の価値観、民主主義に基礎をおく……省略……。」と締めくくっている。（千葉2009：74-76）

このように学校教育では“自由”、“平等”の価値観とともに民主主義を根底にすえ、さらに民主的な社会を築くうえで不可欠な“自由”と“主権在民”

(=国民主権)、“連帯責任”、“権利と義務”について教えることを最大の使命としているのである。

国民学校などの教員は、教員養成大学のような上級学校などで養成されるが、カリキュラムのなかに民主主義の教育に関するものがある。例えば、オーデンセにあるフエン国立社会教員大学(The Fuenen National Institute of social Educators)では、教育学領域群のなかに「就学前教育と民主主義(Pre-school pedagogy and democracy)」という科目を設けている。<sup>註7)</sup>

またそのフエン国立社会教員大学が属しているリレベェルト大学(University College Lillebaelt)の教員教育学部(Departmento of Teather Education)の教員養成課程の科目のなかに民主主義教育に関するプログラムがある。そのなかには初等中等学校教育志望の学生のために「民主的市民育成の学習指導(Teaching and Learning for Democratic Citizenship)」というコースが設けられている。

このコースは、民主主義が今も後もヨーロッパ社会の基礎であるという確固たる信念に基づいて設置されていること、北歐では民主主義は国家統治の原理のみならず、人びとの生活でもあると明言している。そしてこの教育課題として、「北歐型思考の民主主義とは何か(What is democracy in the Nordic way of thinking?)」、「教育、民主的市民、および個人の成長(Edukation demokuratic citizenship and personal growth)」を掲げている。(伊藤 2001: 74-5)

このように、教員養成の段階から学校教育における民主主義教育の重要性を踏まえて、その教育理念や教育方法について正式な科目を配置して徹底して取り組んでいることがわかる。また、学校では民主主義を身につける訓練が常日頃から積重ねられているのである。ルールはみんなで話し合って決め、みんなが納得できるまで十分に話し合う。このような姿勢が知らず知らずのうちに生徒たちが日常的な学校教育のなかで、民主主義を身につけるのである。もちろんこのような訓練をとおして平等と自由の大切さ、お互いの違った価値観を尊重することの意義を学ぶのである。

(3) 自由を尊重する教育

授業は生徒の個性や学習能力に合わせてすすめられる。生徒たちの個性を伸ばし、それぞれの成長の仕方を大事にすることが重視され、強制や押しつけはされない。点数をつけて生徒の学力を評価するための試験はないので、成績表はない。国は大きな教育の方針や目標を決めているが、教え方、教科書（教材）はそれぞれの学校に自由に任され、教師が決めている。国が記述内容を検定するような教科書もなく、生徒に教科書を合わせているので、生徒の学習能力に応じて教科書が違っているという場合もある。自由な教育、教育における自由がここでも尊重されている。

(4) 生徒が学校運営に参加

デンマークには学校や教師を管理する教育委員会といった教育行政機関はない。国民学校の運営は学校の理事会が責任をもって運営している。理事には教師、保護者、そして生徒代表2名が参加する。生徒を理事会という重要な意思決定機関の構成員として位置づけ、民主的な手続きのもとで学校運営に参加させている。これは物事を組織で決める過程で民主的な手段で決定するという貴重な経験を積むことによって、彼らが将来大人になったときに物事を民主的な手続きで決めるうえでこの経験が大いに役立つのである。

このような教育現場で民主主義の生きた教育を経験した子どもたちが、将来デンマークの社会で活動するときに、当然に人間の尊厳と権利、自由、平等、連帯、共生といった民主主義の根底を支える価値を尊重し、社会形成に貢献するであろうことは疑う余地がなさそうである。（野村 2010：184-5）

(5) デンマークの教育制度＝民主主義を育む教育システムと具体的な内容

①就学前教育の特徴

【ア】0～3歳までが保育園、3～6歳までが幼稚園<sup>註8)</sup>で、この期間中は読み書き・計算を教えることをしないというのが一般的である。

理由は保育園や幼稚園は子どもがはじめて家庭外の社会と接するところなので、読み書き・計算よりもみんなと仲良くなることが大切とされる。ただ、国際学力調査などの影響で近年は年長児童に読み書きや発音程度は教えるようになってきているという。しかし主体性、自

立性を重んじるデンマークでは、保育園や幼稚園では自由に遊んでお互い同士の付き合い方などの社会性を身につけるところだという考え方が定着している。

園にいる間は子どもたちは自分の好きな遊びを自由に選んで遊ぶ。幼稚園クラスでは子どもを管理（コントロール）するのではなく、できるだけ子どもがやりたいことをやらせ、そして遊びをとおして自由を学ぶ。しかし自由は責任をとともなうものであるので、遊んだ後はおもちゃの後片づけをさせる。このようにして子どもに遊びをとおして社会性を身につけさせる。

大きな子（年齢の高い子）は小さい子（年齢の低い子）の面倒をみるように教えられ、さらに将来しょうがいを抱えている人に対する偏見を持たないようにするため、なるべく小さい時期にからしょうがいを抱えている子どもと可能な限り同じ施設に通園させるのがよいとされている。小さいときからしょうがいを抱えている人と接することで、子どもたちはこの社会に男や女、老人ばかりではなく体の不自由な人などいろんな人がいるということを理解するようになる。

両親が共働きの家庭が多い成果、筆者が5年前に見学したボーゲンセの国民学校にある幼稚園クラスでは、子どもたちがパンをつくっていた。関係者の説明によると、親が帰宅するまでおなかがすいたときに備えて自分で食べるパンをつくれるようにとのことであった。

- 【イ】 就学前教育のもうひとつの（第二の）特徴は、国民学校に入学する1年前に、「0<ゼロ>年生学級」という1年間の準備教育と言うのがあり、5～7年生までの子どもが通う。ここでは今まで自由奔放に育ってきた子どもに、時間や規則といった概念を教えたり、社会見学として警察や消防署などを見学する。これは自分がどんなまちに住んでいるかを知るためである。このクラスではこの学級でも読み書き・計算を教えないことになっているが、児童が希望すれば教えてもよい。就学前教育は子どもが国民学校に抵抗なく入るための準備をするところであり、幼稚園（4～7歳児）と国民学校との中間にあってつなぎ



の役割りを果たしているため、その重要性から 2008 年から 0 年生学級は義務化された。

【ウ】入り口に対処して「0<ゼロ>年生学級」に呼応させて、出口に対処して「10 年生クラス」というのがある。このクラスはデンマーク独特のもので、10 年生クラスへの継続は義務ではない。このクラスには高等学校や専門学校へ進学するに当たって、まだ学力的にあるいは情緒的に不安だと思ふ生徒が学ぶ。約 50%の生徒が 10 年生に進学する。

## (2) 国民学校（フォルケスコレ：Folkehøskole）

デンマークでは 7 歳から 16 歳までの 9 年間の教育を受ける義務はあるが、学校に行く義務はない。家庭で学校に見合った教育ができるならば学校に行かなくてもよい。このことはデンマークの憲法で保障されている。<sup>註9)</sup>そして、どこでどんな教育を子どもに受けさせるかは国が決めるのではなく、親の権利とされている。しかし大抵の子どもは国民学校に通う。

国民学校は、小中学校の校区のない 1 年生から 9 年生までが通う小中一貫性の公立の学校である。国民学校は通常 0 年生、低学年クラス、中学校、高学年という 4 つのタイプのクラスがある。1 クラスの定員は 28 名とされている。たとえ 30 人の入学者である場合でも、15 人ずつの 2 クラスにしなければならない。わずかに 2 名多いということで 1 クラスのままにしておくことは許されない。大概是 1 クラス 20 名前後である。<sup>註10)</sup>

また、共働きの家庭の子どものために、放課後に学童保育を運営している学校もある。この学童保育事業は、デンマークで 1960 年代から 70 年代にかけて、経済発展による人手不足で共働き家庭が増加した時期に始められた。

授業は生徒の個性や学習能力に合わせてすすめられるので、使う教科書や教材が複数あるということも珍しくない。授業のすすめ方は、生徒たちがお互いに考え合い、協力し合いながら学習するという相互学習のシステムが採用されている場合が多い。したがって机の配置も日本のように黒板に向かって生徒が同じ方向に座って教師と対面する形ではなく、口の字型あるいはグループ学習するという形が一般的である。

授業は生徒の個性に合わせてすすめられるので、全員に同じような試験を課すようなことはない。要するに試験がないということで、日本のような通信簿もない。点数をつけて生徒の学力を評価するということがないので、クラス中で何番目の成績だというようなこともない。9年間の教育期間中試験があるのは9年生のみで、この試験は国が行う統一試験であるが、決して席次を決めるのが目的ではなく、卒業後の進路の参考にするものである。生徒が希望しなければ受けなくてもよい。<sup>註11)</sup>

国民学校の運営は、かつては教育委員会がかかわっていたが、現在は学校の理事会が責任を果たしている。<sup>註12)</sup> 構成メンバーは7人の保護者、2人の教師、そして2人の生徒代表で、校長、副校長は理事会に出席できるが投票権はない。理事会では予算や学校行事などを審議する。生徒代表の理事は授業や学校の運営には発言できるが、人事案件には投票できない。しかし教育現場の不可欠の当事者として、生徒を理事会に参加させていることは注目に値する。

### (3) しょうがいを抱えている子どもの教育

デンマークではどんなに重いしょうがいを抱えていても、子どもは教育を受ける権利があると認識されている。また、しょうがいを抱えているために普通の学校にいけない子どもや、勉強についていけない子どもであっても特別な教育を受ける権利が保障されている。しょうがいを抱えた子どものための特別な教育法はなく、通常の教育基本法で教育を行っている。教育基本法は枠組み法なので、現場の教育はそれぞれのやり方で行われている。しょうがいを抱えている子どもに対する教育も基本的に同じである。

デンマークではしょうがいを抱えている子どもに対しては、しょうがいを抱えている子どもという見方ではなく、ユニークな特徴をもつ子どもというとらえ方をする。

子どもに共通して必要な社会性を身につけさせながら、特別な支援や教育を付加させる。しょうがいを抱えているからといって、特別視しないで柔軟に対応する。その子どもにとって必要な教育を行うために、担任のみならず、理学療法士、作業療法士、生活指導員<sup>註13)</sup> など必要な人財（人材）が集めら

れる。

現在デンマークには、しょうがいを抱えている子どもの教育機会として次のタイプがある。①同じ教室でしょうがいを抱えていない子どもと一緒に勉強する、②ある特定の科目だけ同じ学校のなかにある特殊学級で学ぶ、③養護学級（klasse for svagbørn/sinker）で勉強する、の3つである。どのタイプがその子によいかは心理判定員が判定するが、最終決定は親がすることになっている。

教育を受ける権利は平等にあるが、ここでいう“平等”とはしょうがいを抱えている程度にかかわらず、しょうがいを抱えていない子どもとまったく同じ教育を受けさせなければならないということではない。抱えているしょうがいや理解の程度によってしょうがいを抱えている子どもの教育を専門とする学級や学校で学ぶ場合もある。ノーマライゼーションの観点で知的しょうがいを抱えている子どもが、普通の学校でほかの子どもと同じように学ぶことが重要とされた時期があったが、今では知的しょうがいを抱えた子どもは知的しょうがいを抱えた子どものための特殊学級や養護学校で教育を受けるのが最適であるという理解が一般的になっているという。デンマークでは、しょうがいを抱えている子どもが一般クラスで勉強できない場合は統合教育ではなく、しょうがいを抱えた子どものためのクラスで勉強する。

身体にしょうがいを抱えている子どもの場合、一般の学校で授業を理解できるならば補助者をつけて通学できる。養護学校では各自治体によって運営形態や教育内容は違っており、どこの養護学校でも子どものしょうがいや個性に適したカリキュラムを組んでいる。大半は地域の養護学校に通うが、その子どもに適した学校が地域にない場合は、別の地域の学校に通う。学習にしょうがいを抱えている子どもは薬などで症状をおさえることができるなら、普通のクラスに所属して一緒に勉強することができる。

筆者が訪問したユトランド半島南部のコルディング市にある養護学校は、普通の学校では授業についていけない子どもが学んでいた。この学校がその子どもにふさわしいかどうかは、最初の2週間の子どもの様子を見て、心理判定員、校長、担任が話し合ってきた。学校ではしょうがいを抱えている

子どもに自信をもたせることによって卑屈にならず、価値ある人間であることを自覚させることに主眼を置いていた。上級生になると社会勉強や、その子どもにふさわしいかどうかは、最初の2週間の子どもの様子を見て、心理判定員、校長、担任が話し合ってきめる。学校ではしょうがいを抱えている子どもに主眼を置いていた。上級生になると社会勉強や、その子どもに合う職業につけるように職場実習を行う。

#### (4) 高等学校（ギムナジウム：gymnasium）

デンマークでは高等学校（普通高校）進学率は平均45%程度で、高等学校は高等教育を基礎にしてさらに上級学校を志望する者が進学する。入試試験はないが、9年間の国民学校での理解度から入学の可否が判定される。

高等学校に進学しない生徒は将来自分のなりた職業の専門学校へすすむ。義務教育は終えた生徒の職業別専門学校への進学率は約50%である。職業別専門学校はほとんどの職種にわたって設置されていて、修業年限は3年である。小さいときから自分の個性にあった教育を受けてきているので、高等学校に入れなかったとって劣等感をもつようなことはないし、親も子どもが高等学校にいかなかったとって失望することもない。

デンマークは基本的には学歴社会ではなく実力社会であるので、多種多様な職業教育が充実している（千葉2007：1182）。

#### (5) 大学、上級専門学校

高等学校あるいは高等学校卒業と同等の学力を有する者は、大学やその他の上級専門学校に入学試験なしで入学できる。総合大学（国立）への進学率は2007年は57%で、医師、獣医師、薬剤師、弁護士、エンジニア、高校教師などの専門職を志望する者が進学し、修業年限は6年である。

上級専門学校には国民学校の教師、ソーシャルワーカー、社会福祉施設職員、看護師、理学療法士、作業療法士などを志願する者が学ぶ。例えば国民学校教師や福祉施設職員になるには、“セミナー”と呼ばれる修業年限4年の日本の大学に相当する学校に入学する。高校を卒業してすぐ入学する必要はなく、ポイントシステムを利用して入学するケースが認められている。<sup>註14)</sup>

大学、上級専門学校とも授業料は一切無料で、そのうえ奨学金が月3,600

クローネ（日本円に換算すると約 72,000 円）支給される。これは 18 歳になると子どもは親元を離れて学ぶので、彼らに対する生活支援という意味も含まれているようである。

(6) 国民高等学校（フォルケホイスコーレ：Folkehøjskole）

世界に例のないデンマーク独特の成人のための教育機関で、1844 年に最初の国民高等学校がシュレスヴィヒの南ロデインに開設された。国民高等学校の生みの親とされる N・F・S・グルントヴィは、学問とは試験のためとか、資格をとるためにあるのではなく、自己形成のためにするものであると考え、自由と対話による相互作用による全人教育をめざした。N・F・S・グルントヴィの教育思想は現在のデンマークの教育の根底をなすものであり、彼の教育理念がデンマークの国民高等学校の教育思想として受け継がれており、世界でもっともすすんだ成人教育だという評価を得ているようである。現在デンマークに国民高等学校は、約 90 校（2009 年現在）ある。

国民高等学校は高等学校ではなく、「民衆の大学」という意味があり、その特徴は、①入学資格は 17.5 歳以上、②全寮制であること、③校長ともうひとりの教師は学校敷地内に居住すること、④試験をしてはいけない、⑤資格を与えてはいけない、と決まっている。修業期間は 3～6 か月で、履修できる内容は文学、歴史、自然科学などの伝統的な科目、美術、陶芸、音楽、スポーツなどの趣味を生かした科目、エコロジー、政治学、有機農業、フェミニズムなどの現代的課題の三領域が用意されている。単なる成人の生涯学習ではなく、受講生のなかには大学へ進学する前や、仕事をやめたり、別の仕事を求めるたりする場合、自分のモチベーションを高めるためやリフレッシュするために入学する。また、高齢者のためのコース、夏期だけのコースなどもあり、自分にあったコースを選んで学ぶことができる。

デンマークにおいては、このように乳児・幼児から生徒・学生・さまざまなしょうがいを抱えた子どもたち、そして高齢者等に必要教育が関係機関・関係者の十分な配慮のもとに行われていることがわかる。経済協力開発機構（OECD）などのデータを見ると、デンマークでは子育てと教育への公的支出（GDP 比）は世界で第一位であるが、学習到達度調査（PISA、15 歳対

象)の2009年の結果は決してトップクラスにランクされていない。わが国は両者において全く対照的な結果が示されている(詳細については資料6、7を参照)。わが国はデンマークとは真反対の“脱ゆとり”文教政策によって学習到達度調査の数字上の結果は、読解力(2006年の15位から2009年8位)、数学的応用力(2006年の10位から2009年9位)、科学的応用力(2006年の6位から2009年5位)とすべてにおいて順位ならびに成績を上げている。別の視点から、この順位成績を見ると、「生徒に高い学力を付けさせる圧力を常に保護者から受けているか」ということに対してもわが国は世界ランキング第11位となっている。デンマークは決して上位にランク付けされていない。

## おわりに

確かにデンマーク人やデンマーク社会を一言で表現することはとてもできないが、デンマークに渡って長年暮らしている日本人のんびりとが以下のように語っている。「この国に長年生活してみて、いろいろな人間関係に触れてみると、この国のんびりとの考え方の根底には、どうもS・A・キルケゴールが主張した『エゴイズムとは違う、真の個人主義の精神』が宿っているように思われる。例えば、(自分の)子ども達が自分の将来の道を選択するとき、彼等は親が希望する学校に入学して親を喜ばせてあげようとか、有名な会社に就職して安定した人生を送ろうとか、世間体の良い職業に就こうとかをまず第一に考えることはしない、(子ども自身が)自分でやりたい道を探し(勿論親が何気なく道を示唆することはあっても)、自分で選択肢し、決定することをまず最初に考えることであると、親たちも十分に自覚している。

また別の例として、人間の子の親になる前の人間(男女)の基本的な考え方、生き方としては、若いカップルが共同生活を送る。または結婚を決めるとき、親がとやかく干渉することはない。親は口出ししたくても我慢するのが普通である。結婚は親の為にするのではなく、本人同士で決めればよいことなのである。

更に女性は、結婚しても、家庭が彼女の人生のすべてだとは思っていない。

勿論夫や子どもが大切であるが、自分の人生あつての家庭であり、自分を犠牲にしてまでも、家庭に執着する女性はあまり見られない。デンマークにおいては国民ないし家族一人ひとりが、好きな道を選んで暮らしているという感じを受ける。

S・A・キルケゴールは19世紀後半のり人であり、デンマークが生んだ世界的哲学者であり、19世紀の三大哲学者（ヘーゲル、ニーチェ）のひとりと呼ばれ、*“キリスト教実存（主義）哲学の祖”*と言われてきた。しかし、一方では彼は*“逍遥の人”*とも呼ばれて生涯孤独な人であったようである。日本でも意外な程彼の哲学を多くの人が研究しているので、名前だけは知っている人たちはかなりいるようである。

彼の基本的な思想は、自分自身の過去の歴史から、人間の一生は過去・現在・未来から成ると考え、過去に何を行い、どんな選択をしたかによって理解できるとし、将来の自分は、今自分が行うことと選択することにより決定されると考えた。つまり、人間一人ひとりの人生は、他人の責任において営まれるものではなく、完全に個人の責任において営まれるものであると考えている。

換言すると、人間は*“自分の責任において生きなければならない”*ということの意味しているのである。

現在のデンマークの社会福祉制度・政策の基本的な考え方は、社会が個人に代わって（社会的な）弱者を助けることにあると考えられる。つまり個人が義務を果たす（例えば、税金を納める）ことに対して、社会が責任を持つ（例えば福祉行政を行う）訳で、個人の上に社会が存在している。これは社会主義的な考え方とも言えるであろう。

ただ今日のように社会福祉制度・政策が世界でもトップクラスの水準にまで到達すると、国民が個人の義務や責任を忘れ、自分の権利ばかりを主張するという状態（＝大多数の国民が平等感に浸ってしまっている状態）に陥る危険性が出始めて来ている状況を敏感にキャッチしてデンマークの行く末を案ずる人たちも出て来ているのも事実である。

ところで19世紀前半のアメリカを見たフランスの歴史家A・トクヴィル（Alexis de Tocqueville：1805－1859）は、『アメリカのデモクラシー

(Democracy in America)』の中で「アメリカでアメリカ以上のものを見た」と言っている。彼はアメリカの民主主義の美点をも欠点をも書いている。彼は民主主義のうちに変わるものと変わらないもの（不朽なもの）を見たと書いている。彼は変わらないもの、すなわちデモクラシーの本質を見ぬいたのである。この変わらないものというのは、「平等化」ということを意味しているようである。しかし他方では、彼は「境遇が平等になればなるほど人間個人の力は弱くなり、大衆の流れに身を任せるようになる」とも指摘している（『アメリカの民主主義【上・中・下】』を参照）。

現在のデンマークが果たしてこのような憂うべき状態にまで来ているか否かは疑問であるが、少なくともそういう兆候があちらこちらに見え始めて来ていることは隠せない事実であると言えよう。それ故に今デンマークでは、この落とし穴に落ち込まないようにと、この問題が各方面の人びとから提起され、討論されている。<sup>註16)</sup>

そして1995年の正月にはデンマーク首相や女王までもが、恒例の年頭スピーチで、「あまりにも多くの人達が自分自身で努力することなく、福祉社会の恩恵を当たり前だと受け止めている」（首相のことば）、「責任は私達、あなた、そして私のものです。そして今私達は、それを持たなければなりません」（女王のことば）と国民に訴えた。これはまさに150余年年前、S・A・キルケゴールが主張したことと真意は同じであるように思う。

このような状況のなかで、二十一世紀のデンマークの社会福祉制度・政策の持続性をめぐって議論する折には、S・A・キルケゴールの名前が挙げられることが次第に多くなって来ているようである。彼は150余年経って祖国で再び評価されようとしているのである。

福祉大国、生活大国、幸福度世界一の国といわれているデンマークは、民主主義の成熟とともに自由、平等、連帯、共生が達成されてきた。このような思想・理念・実践から、いまや福祉の思想として世界的に定着しているノーマライゼーション（ノーマリゼーションとも言う）の発祥の国でもある。

しかし、このような心地よい言葉の裏にはA・トクヴィルの指摘しているような個人が弱くなる危険性をはらんでいる。宇宙船地球号のなかの理想郷に



一番近い国だと世界中の人びとから思われているデンマークにおいても、いやデンマークのような状況に置かれているからこそ、今デンマークでは社会福祉制度・政策の見直しが叫ばれ始めて来ており、このような議論に当たっては機会ある毎にS・A・キルケゴールの名前が出て来るようになってきているようである。彼の思想とデンマーク人の考え方、それから現存の社会福祉制度・政策の関係が深いことが少しかわかってきた。

経済活動を中心にグローバル化した現代は、科学の進歩、民主主義的価値や社会規範、情報革新などが国際的にも拡大しつつある時代であると同時に、国際紛争やテロ、暴力、貧困、搾取、核拡散の緊張などがむしろ高まっている時代である。人びとの思想、価値観、地域の文化、生活様式の多様化が進み、言語、歴史や社会的背景が異なる今日の世界にあって人びとの相互理解や共通の目標を分かち合ったり、ひととひととが寄り添って絆を結んだりすることが困難な時代でもある。

このような世界的な状況のなかで、さまざまな違いを認め、尊重しながら同時に相互理解と恒久的な平和の礎を共に築くという人類普遍的課題を達成するうえで、S・A・キルケゴールの思想と考え方が昨今再評価され、よい意味での“個人主義”は二十一世紀のデンマークの国づくりにおいて大切である。デンマーク人の“個人主義”の意味は、人間は生きる道を自分で選択し、自分の責任において営まれるものである。これが真の意味のインディビジュアルイズム（個人主義）であり、これをすべての面で徹底的に貫こうとした人が、S・A・キルケゴールである。<sup>註15)</sup>

私たちが普段深く考えずに使っている「個人主義」という日本語には、「エゴイズム」（＝自己本位・自己中）の響きが強く、個人主義をエゴイズムとほぼ同じ意味で使っているほうが多いようであるが、これは間違った使い方だと思う。<sup>註17)</sup>

S・A・キルケゴールが「個人主義」に徹したというのは、エゴイズムに徹したのとは違うのである。彼は、社会という組織が個人の上位にあって責任を持つのではなく、人間一人ひとりがそれぞれの生活の責任を取るべきだとし、また人間は自分自身に対して責任を持つだけでなく、他人に対しても持つべき

でだと考えている。換言すれば、自分を愛することが出来ない者には、他人を愛することも出来ないことになり、キリスト教の「隣人愛」の精神につながるのである。

N・F・S・グルントヴィの教育思想とその実践は二十一世紀社会においても大きな意味をもつことになるであろう。具体的には、対話による相互作用と、これによってもたらされる相互理解と全人的な人間形成は、いつの時代、どこにおいても必要とされるものであると強く思うからである。

最後にわが国の教育のあり方について述べて、本稿を閉じることにする。第60次教育研究集会で、神野直彦・東京大学名誉教授（財政学専攻）が「危機を超えて『教育社会』へ」と題して記念講演を行った。その要旨は次の通りである。「人間が圧倒的な力を出すのは時代の転換期である。世界は今、農業から工業が主軸の社会に転換した産業革命、軽工業から重工業が主軸の社会に転換した1920年代以来の歴史の峠にある。高度情報化、グローバル化の流れの中で、“工業社会”からソフト産業が基軸の“知識社会”へと転換しようとしている。こんな時代には共に生きていく、という発想が必要で、教育とは人が共に生きていく過程そのものだ。教育が時代の転換の鍵を握る。

教育によって“工業社会”から“知識社会”へと転換した成功例としてスウェーデンがある。スウェーデンの環境教育の教科書にはこんな一節がある〈人は誰でも、適切な動機づけがあれば、驚くほどの速さで学習するものだ〉。人には誰にでも、人間として成長したいという欲求がある。だからこそ、適切な動機づけがあれば、人間は自発的に学び、成長していくという考え方だ。

教育には、外から圧力を与えて変形させていく『盆栽型教育』と、植物を栽培するように自由に枝を伸ばしていく『栽培型教育』がある。日本のこれまでの教育は『盆栽型』で、『栽培型』への転換を考えるべき時だ。……略……。

“競争社会”ではなく“協力社会”に軸足を置く“知識社会”を実現していくための教育原則は〈誰でも、いつでも、どこでも、ただで〉であるべきである。経済、学力差にかかわらず、すべての児童や生徒が等しく学校教育に参加できることが大切である。『学びの社会への参加保障』である。日本ではこのうち〈ただで〉（無償）の視点が欠落している。……略……人が生きていくう

えで、さまざまな問題の所在をつかみ、解き明かしていくための『考えさせる教科書』や、いつでもみんなが学びをやり直せる生涯学習戦略も求められている。」（西日本新聞 2011 年 2 月 15 日〈朝刊〉より抜粋引用）

狭義の福祉大国ではなく、幸福度世界一の真の生活大国を二十一世紀社会においても持続可能にするための明日へのチャレンジにふさわしく、教育と学校の新しいアイデアを考察することが当面の大切な課題である。いまわが国がこの大きな課題に立ち向かっていくことに希望を感じることができるような教育に変革するためのチャレンジ精神が大切であると考えます。

日本の素晴らしい自然、文化、技術を土台とした創造的な学びを経験できれば展望は見えてくる。私たち一人ひとりには大きな可能性を持っているのである。しかし、一部が利益を上げるために弱者を次々と生み出す社会（格差・貧困）で暮らしていると、自信や活力を失いやすく、人間同士の絆が弱くなる。家庭や学校でも、大人が子どもと“ゆとり”を持って向き合えなくなっているのではないだろうか。“負け組み”にならないため、テストで良い点を取るための学びでは未来は開けないであろう。

日本国民みんなが、元気を回復し、豊かな人間関係を取り戻し、老若男女がこの国で生きていることが楽しいと感じることができる社会（生活・福祉大国）の人づくりをする学びの道が拓けてくることが今切望されているのである。

## 註

1) 内村鑑三は高崎藩士の長男として江戸に生まれる（1861～1930年）。1874年に東京外国語学校入学。77年に札幌農学校に入学（二期生）、78年に農商務省に勤める。84年から88年に渡米し、アマースト大、ハートフォード神学校で学ぶ。「信念」の人で、勤務校で宣教師と衝突し、第一高等中学校では教育勅語拝読を巡り「不敬」を問われ、新潟、東京、大阪、熊本、名古屋の教会系学校を異動したあと、失職し、京都に閉塞を余儀なくされる。97年、新聞「万朝報」に招かれ、文筆で立つ決意をする。37歳であった。

これが世界を創造した神（唯一絶対者）にしたがって生きると決意した内村の終生変わらない絶対命題だった。「余は日本のため、日本は世界のため、

世界はキリストのため、そしてすべては神のために」である。しかし、イエスを奉じる教会も、日本国家も、内村の言動をことごとく封じる壁となって立ち上がった。「国体」を否定する「国賊」、これが内村に被せられた代名詞である。

内村が選んだ道は、現実との妥協ではなかった。極に立つことで、無教会主義であり、西洋と東洋を結びつける世界における「日本国の天職」の担い手になることである。この選択は内村の孤立を強めた反面、世界にキリストの精神を立てる。世界の中に日本の可能性を見いだすという狭い門だが信じるにたる道を築くことになる。友愛と平和の道である。具体的には民族融合論であり、非戦論である。明治期、アメリカにその可能性を見いだしえる、と考えた道だ。……省略……。」(鷲田小彌太(2009)『日本を創った思想家たち』PP.219-220より引用)

- 2) 本稿において筆者は“キルケゴール”と表記しているが、筆者によっては全く同一人物に対して“ケルケゴール”や“キュルケゴール”または“ケルケゴール”と標記されることもある。
- 3) 彼の業績については、内村鑑三が資料2のなかで語っている。
- 4) これはS・A・ケルケゴールの考え方とかなり似たものであるが、共同社会の存在を認め、個人と社会は相互に影響し合うという点が、S・A・ケルケゴールとは違うところである、といわれている。
- 5) 東海大学望星塾ではかなり以前から評価し、東海大学関係でデンマークに国民学校を作るなどして、教育実践を行った実績を持つ極めて限られたケースはある。
- 6) わが国の“義務教育”と全く同じではない。
- 7) 千葉忠夫(2009)『世界一幸福な国 デンマークの暮らし方』の第3章：みにくいアヒルの子をいじめたのはなぜ—教育を考える(pp67-104)を参考にし筆者がまとめた。
- 8) 幼稚園といっても就学前教育は行わないので、機能的には保育園(所)である。年齢的に3歳から6歳までの子どものクラスを幼稚園と呼んでいるだけで、デンマークでは保育園(所)が主流である。

- 9) 阿部照哉・畑博行 共編『世界の憲法集〔第四版〕』11：デンマーク（261－273頁）を参照。
- 10) OECDの平均は21.5である（総務省統計局総務省統計研修所編集『世界の統計2010年版』を参照）。
- 11) 「日本の医療国民会議」による21世紀医療フォーラム・医療政策提言－喫緊の5つの課題－を掲げている。その1つとして、「医療や人間の生き方を理解するために、初等教育における「生と死」、「疾病」、「障害（しょうがい）者」、「医療」をテーマとする教育を実施することの必要性を掲げている（日本経済新聞2010年10月30日（朝刊）の全面広告より抜粋）。……は筆者が加えたものである。
- 12) 現在は、教育委員会という制度は全くない。
- 13) ペタゴ、社会生活指導員とも呼ばれる専門資格を持っている職員。
- 14) これは職場経験や外国留学、国民高等学校在籍などがポイントとして加算され、入学許可のポイントに充当できる。この制度を利用して入学した学生の平均年齢は25歳前後となり、その結果新任教師は29歳前後となるため、社会経験豊富な先生が教壇に立つのが一般的である。
- 15) S・A・キルケゴールは個人主義に徹底しすぎたためか、非常に孤独な人生を送ったとも言われる。
- 16) 鈴木優美氏が『デンマークの光と影－福祉社会とネオリベラリズム－』の中で、「世界一幸福な国」、「高福祉国家」と言われ続けてきたデンマークにも新自由主義の波が降りかかり、大きく変貌しつつあると最近の動向、実態について最新のレポートをしている。
- 17) 最近では「大衆“個人主義”」という言葉が使われ始めて来ている。わが子が学校給食を食べてもその費用をいつまでも支払わないとか、わが子を保育園（所）に預けて保育サービスを受けても保育料を数年間に渡って支払わないなどの実態を表現する言葉として使用されている。

## 引用・参考文献

- ・編集委員会代表・仲村優一 一番ヶ瀬康子 (1999)『世界の社会福祉 デンマーク・ノルウェー』(世界の社会福祉 6) 旬報社 ※デンマークの社会福祉については pp.1~160 で述べている。
- ・内村鑑三 (1976)『後世への最大遺物デンマルク国の話』(岩波文庫) 岩波書店
- ・ハル・M・コック 著/小池直人 訳 (2007)『グルントヴィーデンマーク・ナショナルリズムとその止揚一』風媒社
- ・クリステン・M・コル [著] /清水満 [編訳] (2007)『コルの「子どもの学校論」』新評論
- ・オーヴェ・ユースゴー著/川崎一彦監訳 高倉尚子訳 (1999)『光を求めてーデンマークの成人教育 500 年の歴史』東海大学出版会
- ・佐々木正治 (1999)『デンマーク国民大学成立史の研究』風間書房
- ・鷲田小彌太 (2009)『日本を創った思想家たち』PHP 研究所
- ・小池直人 (1999)『改訂版 デンマークを探る』風媒社
- ・清水満 (1997)『共感する心、表現する身体ー美的経験を大切に』新評論
- ・ド・トクヴィル著/井伊玄太郎譚 (1948)『米國の民主政治』研進社
- ・江口千春著/ダム雅子訳 (2010)『デンマークの教育に学ぶー生きていることが楽しい』かもがわ出版
- ・アレクシス・ド・トクヴィル著/岩本健吉郎・松本礼二 共訳 (1972)『アメリカにおけるデモクラシー』研究社
- ・A・トクヴィル 著/井伊玄太郎 訳 (1987)『アメリカの民主政治<【上・中・下】>』(講談社学術文庫 778/779/780) 講談社
- ・小山勉 (2006)『トクヴィル民主主義の三つの学校』(ちくま学芸文庫) 筑摩書房
- ・渡辺 靖 (2010)『アメリカン・デモクラシーの逆説』(岩波新書) 岩波書店
- ・長谷川宏 (2008)『格闘する理性ーヘーゲル・ニーチェ・キルケゴール』(洋泉社の新書) 洋泉社
- ・カール・レヴィット 著/中川秀忠 訳 (2002)『ケルケゴールとニーチェ [新装版]』未来社

- ・花村春樹 訳/著（1998）『「ノーマライゼーションの父」N・E・バンク - ミケルセン【増補改訂版】』ミネルヴァ書房
- ・野村武夫（2004）『ノーマライゼーションが生まれた国・デンマーク』ミネルヴァ書房
- ・千葉忠夫（1995）『高校生たちの見たデンマークー福祉の国のすべてを理解するために』（自分流選書）自分流文庫
- ・千葉忠夫（2007）「各国・地域の社会福祉②デンマーク」仲村優一 他監修『エンサイクロペディア 社会福祉学』中央法規
- ・千葉忠夫（2009）『世界一幸福な国 デンマークの暮らし方』（PHP 新書）PHP 研究所
- ・千葉忠夫（2011）『格差と貧困のないデンマーク世界一幸福な国の人づくり』
- ・野村武夫（2010）『「生活大国」デンマークの福祉政策 ウェルビーイングが育つ条件』ミネルヴァ書房
- ・小島ブランゴード/澤渡夏代ブラント共著（1996）『福祉の国からのメッセージ デンマーク人の生き方/老い方』（丸善ブックス）丸善株式会社
- ・高田ケラー有子（2005）『平らな国デンマークー「幸福度」世界一の社会から』NHK 出版
- ・澤渡夏代ブラント（2005）『デンマークの子育て・人育ち』大月書店
- ・澤渡夏代ブラント（2009）『デンマークの高齢者が世界一幸せなわけ』大月書店
- ・宮下孝美・宮下智美（2005）『あなたの子どもは、あなたの子どもではないーデンマークの36年ー仕事・結婚・子育て・老後』萌文社
- ・清水 満(1996)『改定新版 生のための学校ーデンマークで生まれたフリースクール「フォルケホイスコーレ」の世界』新評論
- ・福田成美（1999）『デンマークの環境に優しい街づくり』新評論
- ・福田成美（2002）『デンマークの緑と文化と人を訪ねて』新評論
- ・ケンジ・ステファン・スズキ（2006）『増補版 デンマークという国 自然エネルギー先進国「風の学校からのレポート』合同出版
- ・鈴木優美（2010）『デンマークの光と影ー福祉社会とネオリベラリズムー』

発行所 産生社 発売元 リベルタ出版

- ・小浜逸郎（2010）『人はひとりで生きていけるか 大衆個人主義の時代』PHP 研究所
- ・NHK「無縁社会プロジェクト」取材班（2010）『無縁社会―“無縁死三万二千人の衝撃”』文藝春秋
- ・総務省統計局総務省統計研修所編（2010）『世界の統計 2010 年版』日本統計協会

西南学院大学人間科学部社会福祉学科

### 【資料編】

資料1 岩倉使節団のデンマークの印象（1873年）

米 わが国からデンマーク（デンマルク）を公式に視察した団体としては、最初ではないかと思われる。岩倉使節団の視察記の一部。

■「時運ノ推遷ニヨリ、今ハ僅ニ仏刻巴梁（パリ）ノ一府ニモ及ハサル人民ニテ、大国ノ間に介シテ、能ク自主ヲ全クスルハ、其民性ノ、強剛ニテ、業に励ミ国ヲ愛シ、不撓ノ精神アルニヨルナリ」（岩波文庫 『特命全権大使欧米回覧実記』）

出典：仲村優一・一番ヶ瀬康子編集委員『世界の社会福祉 デンマーク ノルウェー ⑥』旬報社 p1

資料2 内村鑑三『デンマルク国の話』（岩波文庫）のなかで語っている当時（1895 <明治27> 年7月）のデンマーク（デンマルク）の様子

■『デンマークは欧州北部の一小邦であります。その面積は朝鮮と台湾とを除いた日本帝国の十分の一でありまして、わが北海道の半分に当たり、九州の一島に当たらない国であります。その人口は二百五十万でありまして、日本の二十分の一であります。実に取るに足りないような小国であります。しかしこの国について多くの面白い話があります。

今、単に経済上より観察を下しまして、この小国のけっして侮るべからざる



国であることがわかります。この国の面積と人口とはとてもわが国に及びませんが、しかし富の程度にいたりましてははるかに日本以上であります。その一例を挙げますれば日本国の二十分の一の人口を有するデンマーク国は日本の二分の一の外国貿易をもつのであります。すなわち、デンマーク一人一人外国貿易の高さ日本人一人の十倍に当たるのであります。もってその富の程度がわかります。ある人のいいまするに、デンマーク一人の有する富はドイツ人または英国人または米国人一人の有する富より多いのであります。実に驚くべきことではありませんか。

しからばデンマーク人はどうしてこの富を得たかと問いまするに、それは彼らが国外に多くの領地をもっているからではありません、彼らはもちろん広きグリーンランドをもちます。しかし北氷洋の氷のなかにあるこの領土の経済上ほとんど何の価値もないことは何人も知っております。彼らはまたその面積においてはデンマークの本土に二倍するアイスランドをもちます。しかしその名を聞いてその国の富餓（ふにょう）の土地でないことはすぐにわかります。ほかにわずかに鳥毛（とりのけ）を産するフェロー島があります。またやや富餓（ふにょう）なる西インド中のサンクロア、サントースト、サンユアンの三島があります。これ確かに富の源であります、しかし経済上収支相応藍補うこと少なく（？）きがゆえに、かつてはこれを米国に売却せんとすの計画もあつたくらいであります。ゆえにデンマークの富源といひまして、別に本国以外にあるのではありません。人口一人に対し世界第一の富を彼らに供せしその富源はわが国九州大のデンマーク本土においてあるのであります。

しかるにこのデンマーク本国がけっして富饒の地と称すべきではないのであります。しかるにこのデンマークの富を主としてその土地にあるのであります。国に一鉱山あるのではなく、大港湾の万国の船舶を惹くものがあるのではありません。デンマークの富は主としてその土地にあるのです。その牧場とその家畜と、その樅と白樺との森林と、その沿岸の漁場とにおいてあるのであります。ことにその誇りとするところはその乳酸であります。そのバターとチーズとであります。デンマークは実に乳牛をもって立つ国であるということができます。トーヴァルセンを出して世界の彫刻術に一新紀元を劃し、アンデルセンを出し

て近世お伽話の元祖たらしめ、ケルケゴールを出して無教会主義のキリスト教を世界に唱えしめしデンマークは、実に柔和なる牝牛の産をもって立つ小にして静かなる国であります。

しかるに今を去る四十年前のデンマークはもっと憐れなる国でありました。1864年にドイツ、オーストリアの二強国の圧迫するところとなり、その要求を拒みし結果、ついに開戦の不幸を見、デンマーク人は善く戦いましたが、しかし弱はもって強に勝つ能わず、デッペルの一戦に北軍破れてふたたび起つ能わずにいたりました。デンマークは和を乞いました、しかして敗北の賠償としてドイツ、オーストリアに二国に南部最良の二州シュレスウィヒとホルスタインを割譲しました。戦争はここに終り告げました。しかしデンマークはこれがために窮困の極に達しました。もとより多くもない領土、しかもその最良の部分を持ち去られたのであります。いかにして国運を恢復せんか、いかにして敗戦の大損害を償わんかこれこの時にあたりデンマークの愛国者がその脳漿を絞って考えし問題でありました。国は小さく、民は尠なく、しかして残りし土地に荒漠多し状態（ありさま）でありました。国民の勢力はかかるときに試されるのであります。戦いは敗れ、国は削られ、国民の意気消沈しなにごとにも手のつかざるときに、かかるときに国民の真の価値（ねうち）は判明するのであります。戦勝国の戦後どんあにつまらない政治家にもできます、国威宣揚に伴う事業の発展はどんあにつまらない事業家にもできます、難しいのは、戦敗国の戦後の経営です。国運衰退のときにおける事業の発展であります。戦い敗れて精神に敗れない民が真に偉大なる民であります。宗教といい信仰といい、国運隆盛ときいは何の必要もないのであります。しかしながら国に幽暗（くらき）の臨みしときに精神の光が必要になるのであります。国の興ると亡ぶるとはこのときに定まるのでます。

どんな国にもときには暗黒が臨みます。そのとき、これに打ち勝つことのできる民が、その民が永久に栄ゆるのであります。あたかも疾病の襲うところとなりて人の健康がわかると同然であります。平常の時には弱い人も強い人と違いません。疾病に罹って弱い人は斃れて強い人は存るのであります。そのごとく真に強い国は困難に遭遇して滅びないのであります。その兵は破れ、その財

は尽きてそのときなお起こるの精神を蓄うものであります。これはまことに国民の試練の時であります。このときに滅びないで、彼らは運命のいかんにかかわらず、永久に滅びないのであります。

越王勾踐呉を破りて帰るではありません。デンマーク人は戦いに敗れて家に還ってきました。還りきたれば国は荒れ、財は尽き、見るものとして悲憤失望の種ならざるはなしでありました。「今やデンマークにとり悪しき日なり」と彼らは相互に対していいました。この挨拶に対して「否」と答えうる者は彼らのなかに一人もありませんでした。しかるにここに彼らのなかに一人の工兵士官工兵士官がありました。彼の名をダルガス（Enrico Mylius Dalgas）といひまして、フランス種のデンマーク人でありました。彼の祖先は有名なるユグノー党の一人でありまして、彼らは一六八五年信仰自由のゆえをもって故国フランスを遂われ、あるいは英国に、あるいはオランダに、あるいはプロイセンに、またあるいはデンマークに逃れ来たりし者でありました。ユグノー党の人はいたるところに雌雄と熱信と勤勉とを運びました。英国においてはエリザベス女王のもとにその今や世界に冠たる製造業を起こしました。その他、オランダにおいて、ドイツにおいて、多くの有利的事業は彼らによって起こされました。旧き宗教を維持せんとするの結果フランス国が失いし多くのものなかに、かの国にとり最大の損失と称すべきものはユグノー党の外国脱出でありました。しかして十九世紀の末に当って彼らはいまだなおその祖先の精神を失わなかったのであります。ダルガス、齢は今三十六歳、工兵士官として戦争に臨み、橋を架し、道路を築き、溝を掘るの際、彼は細かに彼の故国の地質を研究しました。しかして戦争いまだ終わらざるに彼はすでに彼の胸中に故国恢復の策を蓄えました。すなわちデンマーク国の欧州大陸に連なる部分にして、その領土の大部分を占むるユトランド（Jutland）の荒漠を化してこれを沃饒の地となさんとの大計画を、彼はすでに彼の胸中に蓄えました。ゆえに戦い敗れて彼の同僚が絶望に圧せられてその故国に帰り来たりしときに、ダルガス一人はその面に微笑を湛えその首に希望の春を戴きました。「今やデンマークにとり悪しき日なり」と彼の同僚は言いました。「まことにしかり」とダルガスは答えました。「そかしながらわれらは外に失いしところのものを内において取り返すを

得べし、君らと余との生存中にわれらはユトランドの曠野を化して薔薇の花咲くところとなすを得べし」と彼は続いて答えました。この工兵士官に預言者イザヤの精神がありました。彼の血管に流るるユグノー党の血はこの時にあたって彼をして平和の天使たらしめました。他人の失望するときに彼は失望しませんでした。彼は彼の国人が剣をもって失ったものを鋤をもって取り返さんと思いました。今や敵国に対して復讐戦を計画するにあらず、鋤と鍬をもって残る領土の曠漠と闘い、これを田園と化して敵に奪われしものを補わんとしました。まことにクリスチャンらしき計画ではありませんか。真正の平和主義者はかかる計画に出なければなりません。

しかしダルガスはただに預言者ではありませんでした。彼は単に夢想家ではありませんでした。工兵士官なる彼は、土木学者でありしと同時に、また地質学者であり植物学者でありました。彼はかくのごとくにして詩人でありしと同時にまた実際家でありました。彼は理想を実現するの術を知っておりました。かかる軍人をわれわれはときどき欧米の軍神のなかに見るのであります軍人といえ人殺すの術にのみ長じている者であるとの思想は外国においては一般に行われておらないのであります。

ユトランドはデンマークの半分以上であります。しかしてその三分の一以上が不毛の地であったのであります。面積一万五千平方マイルのデンマークにとりましては三千平方参の曠野は過大の废物であります。これを化して良田妖野となして、外に失いしところのものを内にありて償わんとするのがそれがダルカスの夢であったのであります。しかしてこの夢を実現するにあたってダルガスの執るべき武器はただ二つでありました。その第一つは水でありました。その第二は樹でありました。荒地に水を注ぐを得、これに樹を植えて植林の実を挙ぐるを得ば、それで事は成るのであります。事はいたって簡単でありました。しかし簡単ではあるが容易ではありませんでした。世に御し難いものとて人間の作った砂漠のごときはありません。もしユトランドの荒地がサハラの上の砂漠のごときものでありましたならば問題ははるかに容易であったのであります。天然の砂漠は水にさえこれに灑ぐを得ばそれでじきに沃土となるのであります。しかし人間の無謀と怠慢とになりし砂漠はこれを恢復するにもっとも難いもの

であります。

しかしてユトランドの荒地はこの種の荒地であったのであります。今より八百年前の昔にはそこに繁茂せる良き林がありました。しかして降っていまより二百年前まではところどころに樫の林を見ることができました。しかるに文明の進むと同時に人の欲心はますます増進し、彼らは土地より取るに急にこれを酬ゆるに緩でありましたゆえに、地は時を追うてますます痩せ衰え、ついに四十年前の憐れむべき状態に立ちいたったのであります。しかし人間の強欲をもってするも地は永久に殺すことのできるものではありません。神と天然とが示すある適當の方法をもってしますれば、この最悪の状態においてある土地をも元始の沃饒に返すことができます。まことに詩人シラーのいいしがごとく、天然には永久の希望あり、壊敗はこれをただ人のあいだにおいてのみ見るのであります。

まず溝を穿ちて水を注ぎ、ヒースと称する荒野の植物を駆逐し、これに代うるに馬鈴薯ならびに牧草をもってするのであります。このことはさほどの困難ではありませんでした。しかし難中の難事は荒地に樹を植ゆることでありました。このことについてダルガスは非常の苦心をもって研究しました。植物界広しといえどもユトランドの荒地に適しそこに成育してレバノンの栄を呈わす樹はあるやなしやと彼は研究に研究を重ねました。しかして彼の心に思い当たりましたのはノルウエーの樅でありました。これは試験してみますと、思うとおりに行きません。樅は生えは生えますが数年ならずして枯れてしまいます。ユトランドの荒地は今やこの強梗なる樹木をさえ養うに足るの養分を存しませんでした。

しかしダルガスの熱心はこれがために挫けませんでした。彼は天然はまた彼にこの難問題をも解決してくれることと確信しました。ゆえに彼はさらに研究を続けました。しかして彼の頭脳にフト浮かびましたことはアルプス産の小樅でありました。もしこれを移植したらはいかんと彼は思いました。しかしてこれを取り来たりてノルウエー産の樅のあいだに植えましたときに、奇なるかな、兩種の樅は相いならんで生長し、年を経るも枯れなかつたのであります。ここにおいて大問題は積けました。ユトランドの荒野に始めて緑の野を見ることが

できました。緑は希望の色であります。ダルガスの希望、デンマークの希望、その民二百五十万の希望は実際に現れました。

しかし問題ははまだ全く釈けませんでした。緑の野はできましたが、緑の林はできませんでした。ユトランドの荒地より建築用の木材をも伐り得んとしたダルガスの野心的欲望は事実となりて現れませんでした。樅はある程度まで生長して、それで成長を止めました。その枯死はアルプス産の小樅の併植をもって防ぎ得ましたけれども、その永久の成長はこれによって成就されませんでした。「ダルガスよ、汝の予言せし材木を与えよ」といってデンマークの農夫らは彼に迫りました。あたかもエジプトより遁れ出でイスラエルの民が一部の失敗のゆえをもってモーセを責めたと同然でありました。しかし神はモーセの祈願を聴きたまいましたがごとくダルガスの心の叫びをも聴きたまいました。黙示は今度は彼に臨まずして彼の子に臨みました。彼の長男をフレデリック・ダルガスといたしました。彼は父の質を受けて善き植物学者でありました。彼は樅の成長について大いなる発見をなしました。

若きダルガスはいいました。大樅がある程度以上に成長しないのは小樅をいつまでも大樅のそばに生しておくからである。もしある時期に達して小樅を斫り払ってしまうならば大樅は独り土地を占領してその成長を続けるであろうと。しかして若きダルガスのこの言を実際に試してみましたところが実にそのとおりでありました。小樅はある程度まで大樅の成長を促すの能力をもっております。しかしその程度に達すればかえってこれを防ぐものである、との奇態なる植物学上の事実が、ダルガス父子によって発見せられたのであります。しかもこの発見はデンマーク国の開発にとりては実に絶大なる発見でありました。これによってユトランドの荒地挽回の難問題は解釈されたのであります。これよりして各地に鬱蒼たる樅の林を見るにいたりました。一八六〇年においてはユトランドの山林はわずか十五万七千エーカーに過ぎませんでした。四十七年後の一九〇七年にいたりましては四十七万六千エーカーの多きに達しました。しかしこれなお全州面積の七分の二厘に過ぎません。さらにダルガスの方法に循い植林を継続いたしますならば数十年の後にはかの地に数百万エーカーの緑林を見るにいたるのでありましょう。実に多種と謂つべしであります。

しかし植林の効果は単に木材の収穫に止まりません。第一にその善き感化を蒙りたるものはユトランドの気候でありました。樹木のなき土地は熱しやすくして冷めやすくあります。ゆえにダルガスの植林以前においてはユトランドの夏は昼は非常に暑くして、夜はときに霜を見ました。四六時中に熱帯の暑気と初冬の霜を見ることがありますれば、植生は堪ったものではありません。その時にあたってユトランドの農夫が収穫成功の希望をもって種ゆるを得し植物は馬鈴薯、黒麦、その他少数のものに過ぎませんでした。しかし植林成功後のかの地の農業は一変しました。夏期の降霜はまったく止まりました。今や小麦なり、砂糖大根なり、北歐産の穀類または野菜にして成熟させるものなきにいたりました。ユトランドは大縦の林の繁茂のゆえをもって良き田園と化しました。木材を与えられし上に善き気候を与えられました。植ゆべきはまことに樹であります。

しかし植林の善き感化はこれに止まりませんでした。樹木の繁茂は海岸より吹き送らるる砂塵の荒廃をとめました。北海沿岸特有の砂丘は海岸近くに喰い止められました。縦は根を地に張りて襲いくる砂塵に対していいました。

ここまでは来るを得べし

しかしここを越ゆべからずと（ヨブ記三十八章一一節）。

北海に浜する国にとりては敵国の艦隊よりも恐るべき砂浜は、戦闘艦ならずして緑の縦の林をもって、ここにみごとに撃退されたのであります。

霜は消え砂は去り、その上に第三に洪水の害は除かれたのであります。このいづこの国においても植林の結果としてじきに現れるものであります。もちろん海拔六百尺をもって最高点となすユトランドにおいてはわが国のごとき山国におけるごとく洪水の害を見ることはありません。しかしその比較的になきこの害すらダルガスの事業によつての祖枯れたのであります。

かくのごとくにしてユトランドの全州は一変しました。廃りし市色はふたたび起こりました。新たな町村は設けられました。地価は非常に騰貴しました。あるところにおいては四十年前の百五十倍に達しました。道路と鉄道とは縦横に築られました。わが四国を島にさらに一千方マイルを加えたるユトランドは復活しました。戦争によって失ひしシュレスウイヒとホルスタインとは今日す

でに償われてなお余りあるとのことでもあります。

しかし、木材よりも、野菜よりも、穀類よりも、蓄類よりも、さらに貴きものは国民の精神であります。デンマーク人の精神はダルガス植林成功の結果としてここに一変したのであります。失望セル彼らはここに希望を恢復しました。彼らは国を削られてさらに新たに良き国を得たのであります。しかも他人の国を奪ったではありません。己れの国を改造したのであります。自由宗教より来る熱誠と忍耐と、これに加うるに大縦、小縦の不思議なる能力とによりて、彼らの荒れたる国を挽回下ののであります。

ダルガスの他の事業については私は今ここに語るの時をもちません。彼はいかにして砂地を田園に化せしか、いかにして沼地の水を排いしか、いかにして磯地を拓いて果園を作りしか、これ植林に劣らぬ面白き物語であります。これらの問題に興味を有うせらるる諸君はじかに私についてお尋ねを願います。

\* \* \* \*

今ここにお話いたしましたデンマークの話は、私どもに何を教えますか。

第一に戦敗かならずしも不幸にあらざることを教えます。国は戦争に負けても滅びません。実に戦争に勝って滅びた国は歴史上けって黜くないのであります。国の興亡は戦争の勝敗によりません。その民の平素の修養によります。善き宗教、善き道徳、善き精神ありて戦敗はかえって善き刺激となりて不幸の民を興します。デンマークは実にその善き実例であります。

第二は天然の無限的生産力を示します。富は大陸にもあります。島嶼にもあります。沃野にもあります。砂漠にもあります。大陸の主かならずしも富者ではありません。小島の所有者かならずしも貧者ではありません。善くこれを開発すれば小島も能く大陸に勝さるの産するのであります。ゆえに国の小さなるはけって歎くに足りません。これに対して国の大なるはけって誇るに足りません。富は有利化されたるエネルギー（力）であります。しかしてエネルギーは太陽の光線にもあります。海の波濤にもあります。吹く風にもあります。噴火する火山にもあります。もしこれを利用するを得ますればこれらはみなことごとく富源であります。かならずしも英国のごとく世界の陸面六分の一の持ち主となるの必要はありません。デンマークでたります。然り、それよりも小な

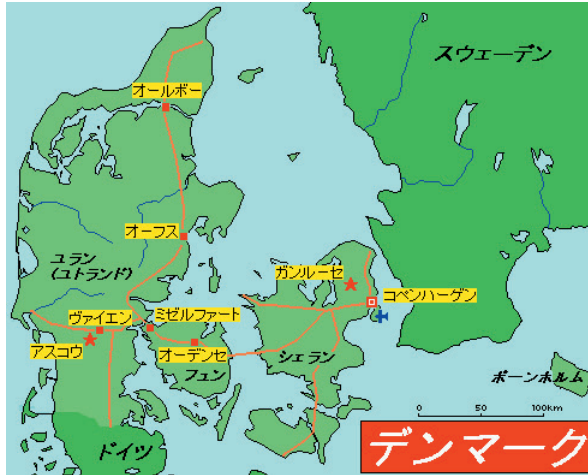


る国で足りません。外に拡がらんとするよりは内を開発すべきであります。

第三に信仰の実力を示します。国の実力は軍隊ではありません。軍艦ではありません。はたまた金ではありません。銀ではありません。信仰であります。このことにかんしましてはマハン大佐もいまだ真理を語りません。アダム・スミス、J・S・ミルもいまだ真理を語りません。このことにかんして真理を語ったものはやはり旧『聖書』であります。

もし芥種のごとき信仰あらば、この山に移りてここよりかしこに移れと命うとも、かならず移らん、また汝らに能わざることなかるべしとイエスはいいました（マタイ伝一七章二〇節）。またおおよそ神によりて生るる者は世に勝つ、われらをして世に勝たしむるものはわれらの信なりと聖ヨハネはいいました（ヨハネ第一書五章四節）。世に勝つ力、地を征服する力はやはり信仰であります。ユグノー党の信仰はその一人をもって鋤と樅樹とをもってデンマーク国を救いました。よしまたダルガス一人に信仰がありましてもデンマーク人全体に信仰がありませんでしたならば、彼の事業も無効に終わったのであります。この人あり、この民あり、フランスより輸入されたる自由信仰あり、デンマーク自主の自由信仰ありてこの偉業が成ったのであります。宗教、信仰、経済に関なしと唱うる者は誰であ利ますか。宗教は詩人と愚人とに佳くして實際家と智者に要なしなどと唱うる人は、歴史も哲学も経済も何にも知らない人であります。国にもしかかる「愚かなる智者」のみありて、ダルガスのごとき「智き愚人」がおりませんならば、不幸一步を誤りて戦敗の悲運に遭いまするならば、その国はそのときたちまちにして亡びてしまうのであります。国家の大危険にして信仰を嘲り、これを無用視するがごときことはありません。私が今日ここにお話いたしましたデンマークとダルガスとにかんする事柄は大いに軽佻浮薄の経世家を警むべきであります。』

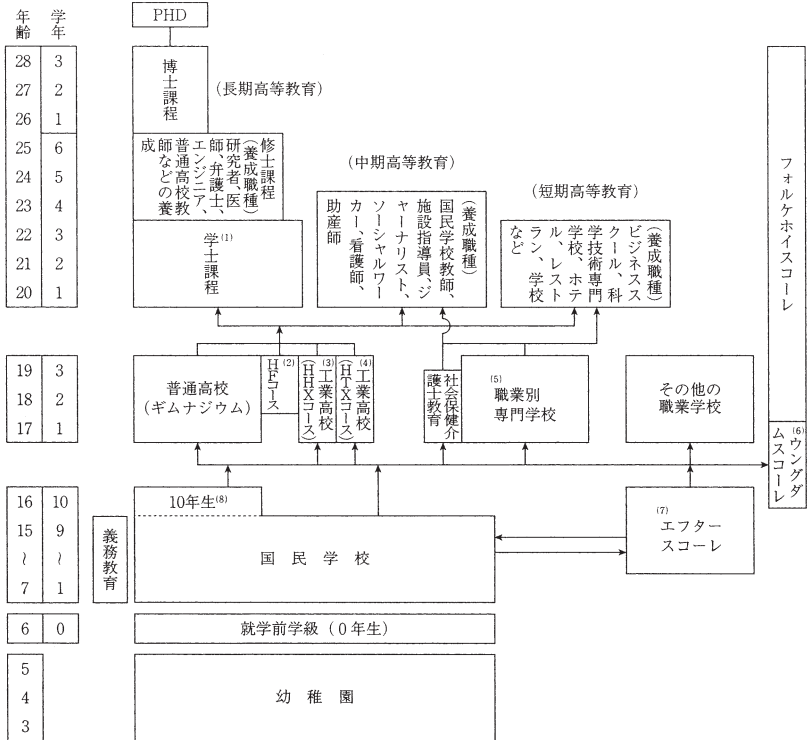
## 資料3 現在のデンマークの領土



出典：世界の地図

<http://www.itoh.org/io/pancake/denmarkmap.gif>

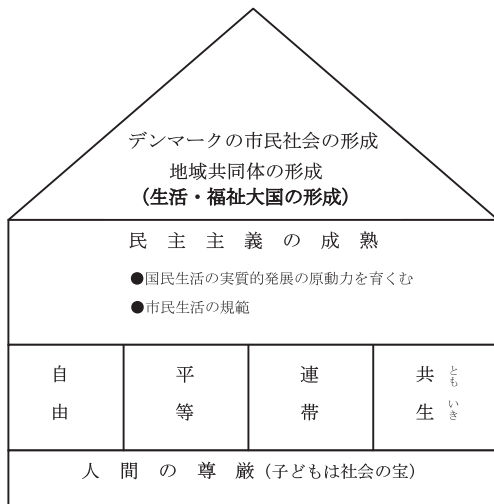
資料4 現在のデンマークの教育システム



- 注：1) 大学教育は6年の期間を終えて修士号を取得するのが一般的。  
 2) HF コース：高等教育資格試験コース。  
 3) HHX コース：高等商業教育資格試験コース。  
 4) HTX コース：高等工業教育資格試験コース。  
 5) 職業別専門学校には科学技術と情報（電気技師など）、建築と内装（大工、左官など）、工芸技術（家具、被服など）、大地から食卓へ（農業、酪農、パン職人など）、交通とメカニック（自動車、航空機整備など）、サービス（理容師など）、商業（会計学、事務など）がある。  
 6) ウングダムスコレ：16歳から19歳までの青少年のためのフォルケホイスコーレ。  
 7) エフタースコーレ：14、5歳から16、7歳くらいまでの青少年のためのフォルケホイスコーレ。  
 8) 10年生：高等学校あるいは専門学校進学にあたってまだ学力的、情緒的に不足していると思う者が継続してその不足を補うクラス。義務教育ではないが50%ぐらいの生徒がこのクラスを継続する。  
 出所：日本文化交流学院千葉忠夫院長による講義資料、および伊藤美好（2001）『パンケーキの国で』平凡社の掲載資料をもとに作成。

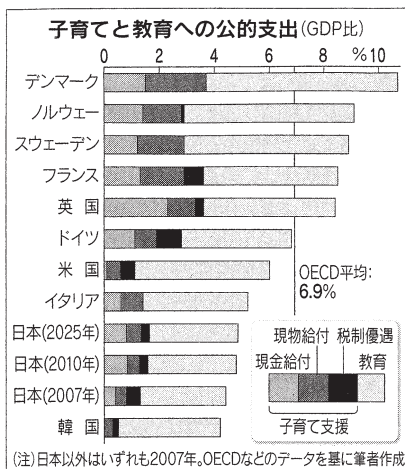
出典：野村武夫（2010）『「生活大國」デンマークの福祉政策ウェルビーイングが育つ条件』ミネルヴァ書房 p186

資料5 デンマークの国民教育の目的



賀戸一郎作図

資料6 子育てと教育への公的支出 (GDP 比)



注) 渥美由喜氏による作図

出典：日本経済新聞 2011年1月20日<朝刊>

資料7 経済協力開発機構（OECD）の学習到達度調査（PISA）の  
2009年の結果＜学力と学習環境＞

(ア)

日本のPISAの国際順位と成績

	2000年	2003年	2006年	2009年
読解力	8位 (522点)	14位 (498点)	15位 (498点)	8位 (520点)
数学的 応用力	1位 (557点)	6位 (534点)	10位 (523点)	9位 (529点)
科学的 応用力	2位 (550点)	2位 (548点)	6位 (531点)	5位 (539点)

(注) OECDは成績を加盟国の平均が500点になるよう  
換算して公表

出典：日本経済新聞 2010年12月20日＜夕刊＞

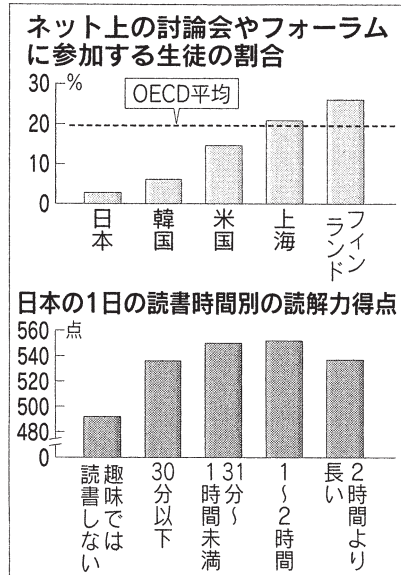
(イ)

生徒に高い学力を付けさせる圧力を常に保護者から受けているか			
	多数から	少数から	ほとんどない
1. ニュージーランド	48.2%	42.6%	9.1%
2. シンガポール	48.0	47.7	4.2
3. カタール	42.3	36.6	21.1
11. 日本	29.3	49.9	20.7
29. 上海	18.4	71.6	10.1
44. 韓国	12.1	66.9	20.9
61. フィンランド	2.9	24.9	72.3
OECD平均	18.8	48.1	33.1

(注) 回答した学校に在籍する生徒の割合。国・地域名の頭の数字は「多数から」の多さで付けた順位

出典：日本経済新聞  
2010年12月17日＜夕刊＞

(ウ)



出典：日本経済新聞  
2010年12月17日＜夕刊＞